

文字の読み書き

2019.1.12 東京定例会
藤坂龍司

はじめに

3歳半～4歳になったら、文字の読み書きを教え始めよう。文字を読め、そして書けるということは、この社会に生きて行く上で非常に大切なことである。また知的遅れが比較的重度でも、文字には興味を持ってくれることがある。文字を獲得することは子どもの世界を確実に広げる。時間と労力をかけて教える価値のある課題である。

文字の読みはまず1～9までの数字の読みから教えるとよい。その次にひらがなを教える。続いてカタカナ、漢字と続く。教える時期はだいたい年少・年中で数字とひらがな、年長でカタカナ、小学校から漢字といったところだろうか。ここでは数字の読みは省略し、ひらがなの読みから取り上げる。

書きもほぼ同じ順番だが、数字の中でも2や8、9などは結構書くのが難しい。これらを教える前に、ひらがなの中で簡単に書けるものを教えた方がよいだろう。

健常児では文字を読み始める時期と書き始める時期がだいたい同じである。しかし自閉症児の場合は形をつかみ、それを手で再現することがとても苦手なので、読みの学習を先行させ、書きの学習は半年くらい遅らせるとよいだろう。

1. ひらがなの読み

<教材>

ひらがなカードを作るか、ひらがなつみきで教える。

50音表で教えるのは、とっかかりとしてはいいかもしれないが、それだけだと全体の中の位置を手掛かりにしてしまうので、一文字だけ取り出すと読めないことになってしまう。どうしても単音だけ取り出して教える必要がある。

ひらがなつみきだと、表に絵が書いてあり、裏は文字だけになっている。最初は表で「ありの『あ』」「いぬの『い』」と教えて行き、しばらくしたら裏返して文字だけにすることで、親しみを持たせることができるので、お勧めである。

市販の文字カードも同じだが、大きすぎるものはあまりお勧めできない。それより6cm四方程度の物を厚紙で手作りすることをお勧めする。絵は無理に描かなくてよい。多くの子どもが、文字だけのシンプルなカードで十分学習できる。逆に余計なものがない分、文字に注意を集中できて、学習が促進される場合もある。ひらがなつみきには濁音がないので、どちらにしても手作りカードが必要になる。

<清音の教え方>

物の名前と同じ教え方でよい。例えば「あ」のカードと「い」のカードをテーブルにおいて、「あ」と言って「あ」をさわらせ、「い」と言って「い」をさわらせる。ランダムローテーションを行う。同じやり方で「う」「え」「お」も追加していく。受容ができたなら、表出も教える。

あ

い

あ行を教えたら、次はか行、さ行、と順番に教えて行けばよい。基本的に1文字ずつ追加していくが、物の名前を覚えるスピードが速くなっている子どもの場合は、か行以降はいきなり「か」「き」「く」「け」「こ」の5つを横並びにして、最初は端から「か、き、く、け、こ」と言いながらさわらせていき、次いで「こ、け、く、き、か」と言いながら反対方向にさわらせていき、そこからランダムに移行することで、一気に5文字を教えることができる場合もある。

<濁音>

清音を教えたら、必ず濁音も教える。ひらかなつみきや市販のひらかなカードには濁音がないので、つい濁音を教え忘れることがある。必ず濁音カードを手作りして教えること。そのとき、清音と対比させる必要があるので、清音のひらかなカードも同じ材料で手作りする。

教え方は清音と同じ。例えば「は」と「ば」のカードを並べておき、「は」と言ったら「は」のカードを、「ば」と言ったら「ば」のカードを選ばせる。

このとき、なかなか濁点に気づいてくれない子が多い。対策としては、濁点を大きく書く。「ば」と指示を出したら素早く「ば」カードの濁点のところを指さして、そこに子どもの注意を向けるようにする。

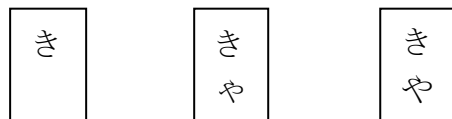


濁音（が行、ざ行、だ行、ば行）と清音が区別できるようになったら、半濁音（ぱ行）も教えよう。

<小さい「ゃ、ゅ、ょ」>

きゃ、きゅ、きょ、しゃ、しゅ、しょなどの拗音（ようおん）の読み方を教える。

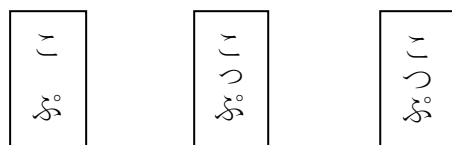
例えば最初に「きゃ」を教えるとしよう。「きゃ」と書いたカードを見せて、「きゃ」と言わせるのは簡単だが、そればかりやると「き」を見ても「きゃ」と発音するようになる。また「きや」と書いてあっても「きゃ」と言うようになる。だから「き」「きゃ」「きや」の三つのカードを対比して区別させなければならない。トレーニングは受容→表出の順に。



<小さい「っ」>

「こっぷ」「きって」などの小さい「っ」の読み方を教える。

ここでも「こっぷ」と書いたカードを見せて「こっぷ」と読ませることは簡単だが、それだけでは「こぷ」でも「こつぷ」でも「こっぷ」と読んでしまうようになる。だからこの三種類の単語カードを対比させる必要がある。



コツは指のプロンプト。「こっぷ」のときは一文字ずつ指で押さえながら、「こ・っ・ぷ」と読んで

やり、子どもにも同じことをさせる。「こっぷ」のときは、読みながら「こ」から「ぷ」まで指をジャンプさせるようにする。「こぷ」は指を持ちあげず、「こ」から「ぷ」まで、カードの表面に指を走らせるようにする。

(2) 単語の読み

ひらがなが1文字ずつ読めるようになったら、ひらがなの単語カードを作り、その意味を取る練習を始める。

その際、単語カードを1文字ずつ読ませることは簡単だが、それだけだと単語をまとまりとしてとらえられないことが多い。そこで複数の単語カードを並べて、こちらがそのどれかを発音し、該当するものを選ばせる受容の訓練を行なう。

この訓練の結果、「りんご」「ばなな」「みかん」などのカードを正確に選べるようになっても、それだけではこれらの単語を識別できるようになったとはいえない。なぜならこれらの単語はみな頭文字が違うので、子どもは最初の1文字（あるいは最後の1文字）だけを見て選んでいる可能性があるからだ。

①そこでまず頭文字が同じで、下の文字が違う単語（例えば「くし」と「くま」）で、受容、表出の練習をする。最初に1文字ずつ読ませて、下の文字が違うことを確認させてから選ばせるとよいだろう。

②下の文字だけが違ういくつかの組み合わせ（「うし」「うま」、「かき」「かめ」など）で、正しく選べるようになったら、今度は下の文字ばかりに注目している可能性があるのを封じる必要がある。そこで、「うし」と「あし」、「うま」と「やま」などの練習をする。

③最後に仕上げとして、「くし」「くま」「うし」「うま」のように、4択で語頭と語尾の両方の文字に着目しないと選べない問題を何種類か作る。これらをランダムで正しく選択できて初めて、単語が読めるようになった、と言える。選択できるようになったら、「これは？」と聞いて言わせる表出の練習もする。

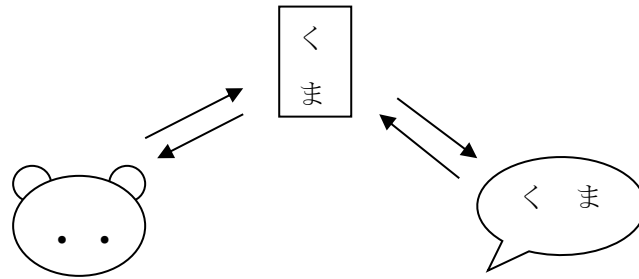


3字の単語でも、時折「たまご」と「たんご」のように1文字だけ違うものを用意して、子どもが一部の文字だけに着目していないかどうかを確かめる必要がある。

<単語の理解>

単語カードの「読み」ができるようになったからと言って、単語が理解できたとは限らない。単語が理解できた、と言えるためには、文字の単語カードと、それがあらかず実物ないし絵カードとのマッチングができる必要がある。

例えば「くま」の単語カードを見せて、「これちょうだい」と言い、いくつかの動物の中からくまを選んで手渡させる。逆にクマのぬいぐるみを見せて、「これちょうだい」と言い、いくつかの単語カードから「くま」を選ばせる。



<指示カード>

文字の理解をさらに進めるために、音声指示を単語カードに書いて、それを見せるだけで指示に従わせる練習をするとよい。

例えば「ばんざい」と書いてあるカードを見せて、「これ、して」という。バンザイできたら強化。他に「ばいばい」「たって」など。

<文の読み>

指示カードが理解できるようになったら、「物×指示」を文字カードにする。「りんご たたいて」「りんご たべて」「ばなな たたいて」「ばなな たべて」など。

また構文カードを文で表したものを作り、構文カードとマッチングさせるとよい。

例えば「おかあさん おりょうりしてる」という文章カードを作り、お母さんがお料理している絵カードとマッチングさせる。

<他の文字>

単語や文の理解と並行して、カタカナやアルファベット、漢字の読みも教えて行く。漢字は意外と理解しやすいので、小学校1年になったら臆さず取り組もう。

2. 文字の書き

文字の書きは一般に文字をなぞることから教え始めることが多いが、自閉症児は形を把握することが苦手なので、それだといつまでも手本に頼ってしまって、いざ手本がないと何も書けない、ということになってしまうことが多い。

そこで線模倣から始めて、次のステップで教えて行く。

①一画ずつまねして書く



②完成した文字を見て、まねして書く



③完成した文字を見ずに、言われた文字を書く

(1) 線模倣

前提として線模倣で、縦線、横線、丸、点と点を直線で結ぶ、点と点を曲線で結ぶ、などのスキルが必要となる。

特に、始点にペンをおかせた状態で、あなたがペンを動かすまで待てるようになると、格段に教えやすくなる。

(2) ひらがなをかく

最初は、「い」「こ」「し」「つ」など、簡単に書けるものから。

よく「せめて自分の名前が書けるように」と子どもの名前から始める人がいるが、それだといきなりむずかしい文字に取り組みさせることになりがちで、うまく行かないことが多い。それよりも、50音すべてを制覇することを目標にして、簡単な文字から、も少しずつステップアップしていきたい。

教材はB4の大きな落書き用紙がお勧めである。あなたは絵のように、子どもの右側（利き腕側）にすわり、モデルを描いてみせると同時に、子どもの手を取ってプロンプトする。

紙は最初、大きめに分割する。例えば図のように6分割して、上に大人が書き、下に子どもに書かせる。筆記用具はクレパス、水性ペン、鉛筆などである。私としては、同色のクレパスか水性ペンをお勧めする。鉛筆より目に鮮やかで、子どもにとって楽しいから。同色にするのは大人と同じ色の文字を書かせて、マッチング感覚を楽しませるためである。



子どもに大人の下に書かせるか、左に書かせるかは、様子を見て決めるとよい。子どもが自分の右側のスペースを見ながら書くことが苦手なようなら、大人の下スペースに書かせるとよいだろう。

字によっても変わってくる。横の位置関係を理解させるためには（例えば「て」の横線をどこまで伸ばすか）、大人の下に書かせるとよいし、縦の位置関係を理解させるには（例えば「し」はどのあたりでくると曲げるか）、大人の横に書かせるとよい。

①一筆ずつ書く

最初は「い」から始めよう。「い」を書かせるとき、はねなどはいらない。縦線2本で十分である。最初は成功しやすいように、できるだけハードルを下げること。

大人の描くスペースと子どもの書くスペースに、それぞれ始点を描く。大人が自分の始点に「びたっ」と言いながらペンを置いて見せ、子どもにも自分の始点にペンを置かせる。この時、子どもが勝手に線を書き始めないよう、左手で子どものペンの先を軽く抑えて、動かさないようにするとよい。

スタンバイできたら、「こうして」と言いながら、線を下に引く。一瞬遅れて、子どものペンを持っていた手を離して、子どもに同じ下向きの線を書かせる。

次にその右にもう一つ始点をおいて、また下向きの線を引かせる。これで「い」が書けたことになる。

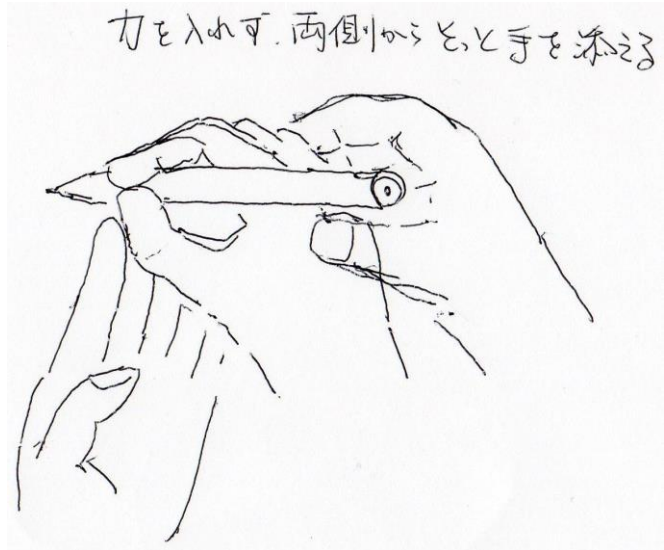
ほかにもいくつかの文字を、まずは一筆ずつ模倣させよう。

<模倣するのが難しい場合>

大人のモデルを見ただけでは模倣するのが難しい場合は、手を添えてプロンプトする。その時は、子どもの右腕の脇から大人が左手を入れて、子どもの持つペンの先にそっと当て、右手で子どもの右手にそっと手を添えるようにして、両方向から軽くプロンプトする。

例えば「し」を書かせるときに、しっかり下まで線を下げられずに、すぐに右にはねてしまう子がいる。そういう子は、大人が書いて見せてからペンを持たせ、大人が両手を添えて子どものペンを誘導するとよい。

ただたくさん親御さんがつい力が入って子どもの手を強く握ってしまうが、これは不快だし、子どもがプロンプトに身をゆだねてしまって、自分で書くことを覚えようとしないのでよくない。あくまで力を抜いて、軽く手を添えるだけにすること。



②モデルを見て書く

一筆ずつまねして書くことにある程度慣れたら、今度は完成した文字を見て、それをまねする練習をする。

例えば子どもの上か右のスペースに「い」と書いてやり、子どものスペースには最初の始点だけを書いてやって、そこでペンを止めさせる。大人が自分の書いた「い」の左側の線を「こうして」と言いながら指でなぞって見せ、子どもに、それをモデルに縦線を書かせる。次は右側の線について同様にする。必要ならさらに子どもの手に手を添える。

徐々に指でなぞってやるプロンプトを減らし、大人のモデルを見れば、自力でその文字が書けるようにする。

③モデルを見ずに書く

最後にモデルを見せずに、例えば『い』書いて」という言葉の指示だけで、その文字が書けるようにしたい。この時、最初は「い」を書いてやって、それを手で隠し、『い』書いて」という。子どもが「い」を思い浮かべられないようなら、手隠しを外してチラッと「い」を見せ、また隠す。それをプロンプトに書かせる。こうすることで、徐々にその文字のイメージが頭の中にしっかり植えつけられ、それを思い浮かべながら、書けるようになるはずである。